

ブを用いた他、豚に誘引された蚊を吸虫管にて採集した。

定点において、アカイエカ、コガタアカイエカ、シナハマダラカの3種を採集した。豚に誘引された蚊の季節消長を調べると、平成6年度においては、アカイエカは6月と8月下旬に2回ピークがみられ、コガタアカイエカは8月下旬に、シナハマダラカは8月上旬にピークがみられた。

坐剤中のリドカイン定量法 加瀬 信明, 矢崎 廣久, 福島 悦子: 第34回千葉県公衆衛生学会, 1996. 2. 29, 千葉市

リドカインは表面麻酔薬として、坐剤中に広く使用されており、その分析には高速液体クロマトグラフ (HPLC) が用いられるが、共存する油脂性基剤との分離が不十分であると、HPLC測定が妨害を受ける。このような場合は、さらに煩雑なクリーンアップ操作を要する。そこで、演者らは油脂性基剤成分が氷温で乳濁析出する性質を利用し、試料を温メタノール抽出後、氷冷する操作を加えたところ、析出した基剤成分は遠心分離で除かれ、良好なクロマトグラムが得られた。4種類の痔疾用坐剤をそれぞれ3検体ずつ測定したところCV値も0.3~1.1%とばらつきも小さかった。この方法を用いて、一般薬を中心とした痔疾用坐剤20検体の分析を行ったところ、満足できる効果が得られた。

南房総地域のマダニ類の生息調査 (第4報) 各種忌避剤によるマダニ類の防除試験 藤曲正登, 角田 隆, 森啓至¹⁾: 第34回千葉県公衆衛生学会, 1996. 2. 29, 千葉市

マダニの被害対策として、ダニとヒトとの接触を阻止する目的で、着衣に処理する有効な忌避剤と使用方法を検討した。

衣類試料として化学繊維の作業用ズボンと木綿ネル布を、忌避剤として木酢液、フタル酸ジメチル、同ジブチル、ジエチルトリアミド、クレオソートを用いた。木酢液を水で4倍希釈した他は70%エタノールで希釈した2%溶液を試料にcm²あたり50 μ l塗布し、フタトゲチマダニ若虫の発生したススキ草地を片側を処理したズボンを着用して歩行、またネル布は1.4m \times 0.7mの半分を処理し地表に広げ、それぞれダニの付着数を無処理側と比較した。

5種の薬剤はズボン、ネル布処理とも56~92%の忌避効果が得られ、フタル酸ジメチルのネル布処理、同ジブチルのズボン処理は忌避率が90%以上だった。

1) 中央食肉衛生検査所

結核菌DNA増幅キットによる喀痰の結核菌検査成績について 岸田一則, 鶴岡佳久, 水口康雄: 第71回日本結核病学会総会, 1996. 3. 21, 東京都

結核菌DNA増幅キットであるアンプリコアについて検討した。結核菌リボソームRNAを増幅するMTD法とほぼ同等の成績であった。培養法と比較したところ感度、特異性ともに良好であった。PCR法で問題となる偽陽性は今回検出されなかった。培養法にくらべ集菌、溶菌等の操作が多いためコンタミネーション、バイオハザードの防止に留意する必要がある。

フタトゲチマダニHaemaphysalis longicornis 幼虫の生存に対する集合効果 角田 隆: 第48回日本衛生動物学会大会, 1996. 3. 27~3. 29. 福岡市

ほとんどのマダニ類は、発育や繁殖を行うために、幼虫・若虫・成虫各期において宿主への寄生と離脱を行う。宿主に寄生するため、マダニは植物表面上等で宿主を待ち伏せする。このとき、葉の裏や茎の先端でマダニが集団を形成するのが観察される。マダニ類の生存に及ぼす集合の効果を検証するため、室内実験を行った。2つの湿度条件下 (98% R. H., 88% R. H.; 20 $^{\circ}$ C) において、フタトゲチマダニ幼虫をそれぞれ1, 2, 4, 8, 16, 32頭区に分け、生存率を調べた。平均の生存日数を比較すると、低湿度条件 (88% R. H.) では、単独区と2頭以上の区との間にほとんど差がみられなかった。高湿度 (98% R. H.) では、2頭以上の区になると単独区に比べて生存期間が長くなる傾向が見られた。

休耕田におけるアカネズミとタテツツガムシの分布について 藤曲正登: 第48回日本衛生動物学会大会, 1996. 3. 28, 福岡市

タテツツガムシ (タテ) の発生する休耕田において記号放送によりアカネズミのホームレンジ (HR) を求め、ネズミの行動と地表のタテの分布を比較し、ツツガムシ類の分散に果たすネズミ類の役割を検討した。

1994, 95年の11月, 12月に天津小湊町の丘陵部の休耕田に70 \times 50mの試験区を設け、10m間隔に生捕ワナをセットした。記号放送を繰り返し得られた補点からHRを推定し、ネズミ体表のツツガムシ相とツルグレン法による地表のツツガムシ相を比較した。

アカネズミの活動域は年により変動し、生息密度とHRの大きさは反比例したが、生息密度が高くともHRは安定したツツガムシの発生時期にアカネズミの移動は少ないものと考えられた。個体の最大移動距離は36m, 最大HRは700m²だったが、ネズミのHRの大きさとタテの付着数に相関は見られなかった。

3. 著書 (抄録)

「水道用語辞典」

分担執筆 日野 隆信, 日本水道協会 (1996年2月)

水道に従事する人達のための経営及び技術分野の用語約4700語を収録した辞典。